



カンフーハッスル(Kung Fu Hustle)

2004(平成16)年10月25日鑑賞(梅田ブルク7)

監督・製作・脚本・主演＝チャウ・シンチー／出演＝ユン・ワー／ユン・チウ／ドン・ジーホワ／シン・ユー／チウ・チーリン／ジア・カンシー／フォン・ハックオン／ブルース・リャン／チャン・クオックワン／ラム・ジーチョン／ホアン・シェンイー (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2004年中国、アメリカ合作映画／103分)

……いやー、びっくりした！ 驚いた！ ここまでやるか！ バカバカしいと思いつつ、何度も大声で笑い、観終わった後は、腹の底から面白かったなあと実感！ これぞ娯楽映画！ 落ち込んだ時の気分転換には最適！ ついでながら、紅一点のベッピンさんもよかったよ……。

カンフー映画あれこれ

カンフー映画といえば香港。そしてカンフー映画と聞いてすぐに思い浮かぶのが、ブルース・リーとジャッキー・チェンの2人。しかし、カンフー映画は、その程度のものではない。

カンフー映画のすごさは、この映画のパンフレットの中で浦川とめ氏(ライター★香港アクション映画応援隊)が5頁にわたって書いている、「功夫映画史～ブルース・リーから、現ハリウッドへの多大なる影響まで～」という解説を読めば実によくわかる。

これは、香港のカンフー映画に関する小バイブルともいえる貴重な文献だ。

この解説の最後の頁には、香港映画で高度な発達を遂げたワイヤーワークが『マトリックス』(99年)によってハリウッドに本格的に持ち込まれて大人気を呼んだが、今や食傷傾向になり、「猫も杓子もワイヤーの時期は過ぎたようだ」と分析している。

そして「原点への回帰と、ワイヤーでなければやれないことの選別、この2方向の追究の中からワイヤーワークは再び香港で進化していくのではないだろうか」と指摘

しているが、これは何とも正鵠を射たもので私も大賛成！

豚小屋砦の達人達！

この映画のタイトルは『カンフーハッスル』だが、宣伝のうたい文句は「これが、史上最強のありえねー闘いだ!!」というもの。したがって、次から次へとスクリーン上に登場するカンフーの達人たちは、そりゃすごいもの。

そしてこの映画の面白い趣向は、これらの達人たちがみんな、カンフーの世界から足を洗い、市井の人たちに交じってひっそりと生活をしているという設定をしたこと。だから当然彼らは日常生活においてその技を見せることはなく、「コシの弱い麵打職人」(ドン・ジーホワ)、「担がれやすい人足」(シン・ユウ)、「手荒い仕立屋」(チウ・チーリン)として働いているし、家主夫婦(妻ユン・チウと夫ユン・ワー)は日々、家賃の取り立てに精を出している。

また、彼らの住んでいるところが何とも面白い。そのアパートの名前は、何と「豚小屋砦」……。

これらの達人たちが立ち上がらなければならなくなったのは、いわば「外圧」のせい。つまり、冷酷非情のギャング団に対抗するためだ。

ギャング団の横暴に対して、1人また1人とやむをえず立ち上がったカンフーの達人たちの技は……？

斧頭会とその応援部隊は？

斧頭会とは、そのネーミングどおり斧を武器として悪逆非道の限りをつくすギャング団。

彼らはいったん「豚小屋砦」を制圧したものの、そこに突然カンフーの達人3人が登場してきたため、撤退を余儀なくされた。

そこで斧頭会が雇った最初の刺客は、「古琴波動拳」を必殺技とする「奏でる刺客」の2人(ジア・カンシーとフォン・ハックオン)。

さらにこの2人が、家主夫婦すなわち必殺技「獅子の咆吼」の妻と必殺技「太極拳」の夫に敗れると、「最強の殺し屋」としてたどりついたのが、「笑う殺し屋・火雲邪神」(ブルース・リャン)。

「豚小屋砦」の戦士たちといい、「斧頭会」が雇った刺客たちといい、実に個性豊か

で楽しい面々……？

スクリーン上で次々と展開されるそれらの対決は実にバカバカしいが、実に面白い。そして何といてもその技術はホンマもの……。

変な主人公が見事に大ヘンシン！

この映画の主人公であり、監督・製作・脚本を兼ねているのがシン（チャウ・シンチー）。しかし彼は、映画の冒頭から一貫してずっと冴えないチンピラ。その相棒である「細っ腹の相方」（ラム・ジーチョン）も全く頼りにならない存在。

そのシンが、子供の頃、ヘンなオジサンに騙されて、なけなしの小遣いはたいて買ったのが『如来神掌』という本。これでカンフーの達人になれると思ったら、実はそれは大まちがい！ いじめられている少女を助けるべく、悪ガキグループに対して敢然と挑んだのはよかったが、少年のシンは無残な敗退。こんなはずでは……？ と思いつつも、立ち上がれず、悪ガキたちから小便をひっかけられる始末……。

こんなシンは、青年になってからも所詮、チンピラ稼業しかできない。できることといえば、言葉が不自由ながら街でけなげに生きているアイス売りの女の子から、アイスクリームをタダで取っていくくらいのもの。何とも情けない。しかし、なぜこんなチンピラ役が主人公？ と思っていると「見せ場」はラストに……。それは、この映画を観てのお楽しみだ！

これは面白い！ これぞ映画！

スクリーン上には再三バカバカしいと思うシーンが登場する。それを観ていると、こんな三流映画、四流映画！ と思ってしまうが、それだけではなく本格的なシーンも次々と……。

そうすると、バカバカしいシーンについても「それもお愛嬌」と思えてきて、逆に楽しくなってくるもの。

まさに、うたい文句である「ありえねー」シーンの連続を、理屈抜きで楽しめばいい。「これは面白い！ これぞ映画！」と思えることまちがいなし！

注目を集める紅一点！

この映画はカンフー映画だから、登場するのは男ばかり（家主の妻は女性だが、失

礼ながら論外……?)。そんな中、紅一点として登場するのが、前述したアイス売りの女の子のフォン(ホアン・シェンイー)。チャイナドレスを着て街を行き交う女性が多い中、フォンだけはシンプルな服装で、アイスクリームを売って生計をたてている。

そして実は、彼女こそが主人公シンが少年の頃、悪ガキたちにいじめられているのを救い出そうとして失敗した女の子。大人になったシンはフォンのことなど忘れていたが、フォンは決してシンのことを忘れていなかった。その結果、ハッピーエンドは……?

フォンを演じるホアン・シェンイーは、いくつかのコマーシャルに出演しているが、映画はこれがデビュー作とのこと。現在、北京電影学院で演劇を専攻しているとのことだが、次作には主役として登場し、大ブレイクするかも……? 私の目には、そんな予感がある美少女に見えたが……?

2004(平成16)年10月26日記



© 2004 COLUMBIA PICTURES FILM
PRODUCTION ASIA LIMITED.
ALL RIGHTS RESERVED.

『カンフーハッスル コレクターズ・エディション』
DVD

価格：3,990円(税込)

発売・販売元：(株)ソニー・ピクチャーズ エンタ
テインメント

第9章

肩肘張らずに楽しもう!